

折衷主義の諸類型

三 浦 俊 彦

哲学の諸学説の間に生ずる対立の中には、分野を横断してみられる普遍的かつ一般的なものはいくつかある。その対立は、複数の理論を包括する二大陣営の対立として現われる。实在論と反实在論（観念論、実証主義など）、認知主義と非認知主義、普遍主義と相対主義（文脈主義）、原子論と全体論（多元論と一元論）、還元主義と反還元主義、合理主義と経験主義、本質主義と反本質主義、内在主義と外在主義などが挙げられるだろう。

これらの対立軸のうち、最も大きな、高階レベルでの区別を形成するのは、諸理論を営む行為の本性を語用論的に分割する認知主義・非認知主義の対比だろう。この根本的な対立陣営のどちらに属するかは、他の対立軸での立場を相当程度決定する傾向がある。たとえば、ある論題において非認知主義者である論者が当該論題において反本質主義者であること、反实在論者でもあるだろうこと、相対主義者でもあるだろうことは容易に推測できる。

互いに連動する対立軸は他にもある。たとえば、原子論と全体論、還元主義と反還元主義という二種の区別は、前者が存在論的区別、後者が方法論的な区別という全く異なる座標軸に沿った区別ではあるが、原子論的世界観を支持する者は還元主義的探究を要求し、全体論的世界観を奉ずる者は反還元主義的探究を採用する傾向が強いことは当然のように感じられる。实在論と観念論、普遍主義と相対主義という二種の対立においても、实在論的な諸理論が普遍主義的傾向を帯び、観念論的

諸理論が相対主義的になりやすいのも当然と言えよう。また、原子論と全体論、内在主義と外在主義という二種の対立においては、原子論と内在主義、全体論と外在主義が結びつく傾向が強い。

いずれの場合についても言えることは、そうした立場間の相関関係は、各立場からの論理的帰結ではなく、自然的事実にすぎないということである。相対主義的实在論が成り立ちえないわけではないし、全体論を支持する還元主義的内在主義者が無条件で矛盾しているわけでもない。認知主義者が反本質主義を採るなどということはむしろありふれている。また、これらの相関関係の程度は論題によって変わる。認知主義と非認知主義の対立に他の対立における立場が依存する度合いは、倫理学における場合と美学における場合とは異なるだろう。美学の内部でも、美的経験の研究と芸術定義の研究とでは、やはり対立における立場同士の依存度が異なるに違いない。

そして最も重要なのは、対立軸のどこに位置するかが明確でない理論も多数あるということである。どの分野においても、きわめて多数の学者が、何らかの折衷的立場を支持する傾向があるということだ。中庸に真理があるというアリストテレス的立場にコミットするまでもなく、印象のうえで最も強い説得力を帯びるのは、両極端の立場を何らかの仕方ですべて折衷主義的なスタンスである。しかし折衷主義という言葉で、具体的にはどのような折衷が意味されている、あるいは意味され得るのだろうか。折衷のパターンを整理し、いかなる折衷主義が実践的に有効であるかを調べるのが本稿の目的である。

1 折衷主義の基本類型

ある概念、たとえば真理、知識、善、行為、意図、美、芸術などの基本概念を「定義」する場面を考えよう。ここで概念の定義とは、当該概念の必要十分条件を特定すること、と定義しておこう。定義の定義は循環的なデリケートな問題となるが、ここでは、定義論の詳細に入り込むことはしない。「必要十分条件の特定」という記述は、定義が満たす必要十分条件

ではなく単なる必要条件にとどまると考えられるが、ここでは「正しい定義」のあり方ではなく「定義の折衷」のあり方を分析することに主眼を置く。よって、各々の立場での定義の内容はさしあたり問わず、簡略な命題Zx、Gxで表わすことにする。ここでは内在主義と外在主義をとり、xの不特定の内在主義的な定義をZx、不特定の外在主義的な定義をGxで表わすことにしよう。

芸術定義論の中からその両極の各々最も単純な例を見ておこう。Zxの代表は、クライブ・ベルの形式主義的定義である。

芸術作品に不可欠な共有性質は、美的情緒を刺激する「意義深い形式 significant form」である。(Bell, 1914, ch. I, sec. 1)

ベルは「美的情緒」を狭く解釈し、たとえばウィリアム・パウエル・フリス『鉄道の駅』（一八六二年）のような有名な絵画について、記述的・報告的に過ぎないという理由で芸術とは認めないという態度をとった。極端な内在主義者であると言えるだろう。

Gxの典型例としては、ジョージ・ディッキーによる最初の制度主義的定式化を挙げよう。

記述的意味での芸術作品とは、社会あるいはその下位グループが鑑賞の候補という地位を授与した人工物である。(Dickie, 1969, p.254, 1971, p.101)

ディッキーは「鑑賞」という語から「美的」という含みを除去し、「対象の関連諸側面への注意の集中」という意味合いだけを認めたので (Dickie, 1964)、この定義は純粹な外在主義的定義になっていると言える。

折衷主義的な立場は、この両極端の特徴づけの妥協を模索するわけだが、第一に考えられるのは、中間的な単語を採用す

る方法である。 Nx で採用されている「美的」あるいはその類義語である内在的述語、 Gx で採用されている「社会」あるいはその類義語である外在的述語、この2つを融合させた意味を持つ単語を定義項に採用するのだ。しかし極度に反還元主義的立場を採らない限り、内在的述語と外在的述語を崩さず組み合わせることで中間的立場に至る方法の方が容易であろう。そこで次に、 N と G と x をどのように組み合わせさせて折衷主義的理論が生成されるのか、という構造論的な問題に注意を集中することにしよう。

真っ先に思いつかれるのは、単純に論理結合子で結びつける生成法だろう。形式的には、次の四通りがある。

$$Nx \vee Gx$$

$$Nx \& Gx$$

$$Nx \leftrightarrow Gx$$

$$Gx \rightarrow Nx$$

ここで、選言、連言、条件の三つの結合子は、真理関数である必要はないが、選言と連言が非真理関数的意味を持たねばならない理由はない。対して条件の二パターンは、真理関数としての実質含意だとしたら、それぞれ $Nx \prec Gx$ 、 $Gx \prec Nx$ に変換できることとなるが、これは選言的定義の一種である。「 N でない x 」は「内在性質 N を持たない x 」という意味であるから、否定的な形ではあれ内在性質による特徴づけとなっており、 $Nx \downarrow Gx$ が内在主義的定義と外在主義的定義との選言であることに間違いない。「 G でない x 」にも同様のことが言える。 $Gx \downarrow Nx$ は外在主義的定義と内在主義的定義との選言である。

それでは、折衷主義的定義は選言的、選言的の二種類のみ還元されるのだろうか。非真理関数的な条件命題による定義

は例外と言えるだろう。それについては後に考察する。ここでは、形式的に選言命題でありながら複雑な折衷法を採る立場を検討しよう。具体的には、クラスター説と呼ばれる、内在性質または外在性質の特定を開放的におく選言的定義の亜種のことである。クラスター説は次のような形で定式化される。

$$A1x \vee A2x \vee A3x \vee \dots \vee Anx$$

ただし $A1x$ は $B1x \ \& \ B2x \ \& \ B3x \ \& \ \dots$ の形式をとる。

すなわち、連言命題の選言によって定義がなされるのだが、各々の選言肢を構成する連言命題の連言肢の述語 B のメンバーが決まっていると考えるならば、通常の選言的定義と形式的には変わらない。対して、クラスター説の発想源である家族的類似の理念に従って B のメンバーが不定であるとするならば (Gaut, 2000)、その変化によって A のメンバーも変わることになり、選言命題が一つの命題に定まらなくなる。後者の場合は、クラスター説は定義ではなく、単なる「特徴づけ」となるだろう。

B のメンバーが確定していると決めた場合はどうか。実際のクラスターの説明は、美学、倫理学、言語哲学などいかなる分野においても、 $A1x \vee A2x \vee A3x \vee \dots \vee Anx$ が当該概念の必要十分条件ではなく、単なる十分条件であるとして提示されることが多い (Dutton, 2006)。これも家族的類似の理念に沿った定式化であるが、その場合も当然、クラスター説は当該概念の「定義」を与えるものではないことになる。

こうして見ると、クラスター説は、定義として成立しないか、選言的定義であるかいずれかである。ただし、定義として成立する場合にはクラスター説は確かに形式的に選言的定義であるが、内容的には単なる $Nx \ \< \ Gx$ や $\sim Nx \ \< \ Gx$ 、 $\sim Gx \ \< \ Nx$ とは異なることに注意しなければならない。なぜなら、すでに見た三通りの選言的定義では、各々の選言肢が純粹な

内在主義的命題か外在主義的命題であると想定されていたからである。クラスターの定義の場合、各々の選言肢が複数の命題の連言になっているため、その複数命題の中に内在主義的命題と外在主義的命題が混在することが許される。こうして、内在主義的命題と外在主義的命題を単純に選言で結びつけるのではなく、個々の選言肢が内在性質と外在性質による共同の特徴づけであるような、「全体的に内在性と外在性が混ざり合った」定義が得られることになる。

そのように考えると、連言による折衷主義的定義は、クラスターの定義の中の純粹形と言うべき特殊例として包摂されるべきことがわかる。ただ一つの選言肢から成るクラスターの定義と見なせるからだ。同様に、選言による折衷主義的定義も、クラスターの定義の特殊例として包摂されるべきである。選言肢の各々が純粹な内在主義的命題と外在主義的命題であるようなクラスターの定義と見なせるからだ。内在主義的命題と外在主義的命題の選言に還元できる条件の定義の場合も同様である。選言肢の一方が否定命題であるという違いがあるだけだからだ。

ただし正確に言うと、 $\sim N \times \sim$ と $\sim G \times$ は、それぞれ内在主義的命題、外在主義的命題であるにしても、「單純命題」ではない。否定演算子がかかっているからである。否定演算子から文演算子一般に拡張して考えると、別の形の折衷主義的定義の可能性が見えてくるだろう。具体的には、内在主義的命題に外在主義的演算子をかぶせるもの、外在主義的命題に内在主義的演算子をかぶせるものである。

$G(N \times)$
 $N(G \times)$

芸術定義論の中からそれぞれの代表例を考えてみよう。内容を具体的に特定した定義の例はあとでまとめて見るとして、まず形式的な解釈を確認しておく。 $G(N \times)$ としては、美的性質によって x を特徴づけてから、その $N \times$ を社会的に認める、

あるいはもっと狭い範囲では、制作者が Nx に意図などの志向的態度を向ける、といった形で関係的性質をかぶせるような定義が挙げられる。 $N(Gx)$ としては、アートワールドで x に特定の役割が認定されるといったような関係的背景が、 x の知覚的性質に反映されることを要求するような定義が考えられるだろう。

ここまでで得られた折衷主義の基本パターンは、三種類である。連言的定義と選言的定義を特殊例として含むクラスターの定義、 $G(Nx)$ という形の内在主義的外在主義の定義、 $N(Gx)$ という形の外在主義的内在主義の定義である。この三種類は、折衷主義と言われて真っ先に思いつかれる素朴な連言命題と選言命題を設定するところから自動的に導き出されたバリエーションである。これら以外の折衷主義の異型は存在するだろうか。

$G(Nx)$ 、 $N(Gx)$ という二つのパターンを持つ高階の述定と、素朴な連言主義とを併用することで、別の種類の折衷主義的定義が構成できよう。 $G(Nx)$ は Nx 全体に G を述定しているが、 G のみに N を述定することもできる。 N と G を入れ替えてもちろん同様のことができる。すなわち、次の二種類のパターンが新たに得られる。

Nx & GN

Gx & NG

$G(Nx)$ と Nx & GN はともに、 x の特徴づけとして N を適用してから G を適用する形をしているが、論理構造は異なる。前者では、 Nx なる x のうち、さらにその適合が G で制約されるものへと x を絞り込んでいく。対して後者では、 Nx なる N のうち、さらにその適合が G で制約されるものへと N を絞り込んでいく。より正確に述べると、後者においては、 G が当てはまるような N によって当該概念が定義される。前者において x の外延は Nx ではまだ決定していないのに対し、後者においては x の外延は Nx の段階ですでに決定されており、その N という性質は G と述定されるべき性質の一つであることが注

記されているのである。

再び芸術定義論から例を挙げよう。 $Nx \& Gz$ の例としては、美的性質によって x を特徴づけてから、美的性質というものは文化ごとに文脈的に判定されるものと考える文化相対主義や社会構築主義による定義が挙げられる。 $Gx \& Nz$ の例としては、アートワールドで特定の役割を認定されるといったように x を特徴づけ、同時にアートワールドそれ自体が特定の機能的性質によって特徴づけられる、あるいは他の文化実践ワールドとは異なる固有の内的特徴を持つとする制度機能説のようなものが考えられるだろう。

このように、基本的な折衷主義的定義は、クラスターの定義（特殊例として連言的定義と選言的定義を含む）、 $G(Nz)$ 、 $N(Gx)$ 、 $Nx \& Gz$ 、 $Gx \& Nz$ の五種類である。「定義」をめぐる理論に限定しなければ、一般的に、基本的な折衷主義的理論は五種類ある、と表現するのが適切だろう。この基本的パターンをさらに組み合わせることで、理論的にはいくらかでも複雑な理論が構成できる。たとえば、 $(Nx \& Gz) \vee N(Gx)$ 、 $N(Nx \vee Gx)$ 、 $G(Nx \& Gz) \vee N(Gx)$ 等々、これらに該当する理論が実際に説得力を持って提唱されているかどうかは別として、派生的なパターンは無限に産出することができる。

2 対立軸ごとの固有論理

ここまでの考察は、 N 、 G として内在的性質、外在的性質を想定し、内在主義的理論と外在主義的理論の対立の調停としての折衷主義について考えてきた。他の対立軸についても同様の考察が当てはまるとは限らない。諸理論間の最も大きな区別を形成する認知主義・非認知主義の対立軸について考えてみると、以下の命題は折衷的とは言えないことがわかるだろう。

$Nx \vee Gx$

$Nx \& Gx$

たとえば「善」の認知主義的定義と非認知主義的定義を選言で結びつけたなら、認知主義的定義が優先され、非認知主義的選言肢は無用となるだろう。実際の運用で、認知主義的基準があるにもかかわらずあえて非認知主義的な解釈を採用する理由がないからだ。対して、両者を連言で結びつけたなら、全体が非認知主義的になることは目に見えている。認知主義的基準が非認知主義的理由で解除されることになるからである。これは三値論理学の言葉で言い直すとわかりやすい。真なる文と真理値なしの文を選言でつないだならば真、連言でつないだならば真理値なし、というのが標準的な付値原則である (Tukasiewicz, 1920)。当該命題を真として提示するのが認知主義的定義、真理値なしとして提示するのが非認知主義的定義であるから (1)、その両者の連言、選言のいずれも、折衷主義的にはならず、いずれかに吸収されてしまうのである。

$G(Nx)$ と $N(Gx)$ についても同様である。認知主義的定式化が非認知主義的論理に服するという定義において、当然、全体は非認知主義的定義となるように見える。また、非認知主義的定式化が認知主義的論理に服するという定義においては、全体は認知主義的定義となるように感じられる。この二者については連言・選言の場合ほど自明ではないので、認知主義的功利主義と情緒主義の組み合わせで確かめてみよう。

$G(Nx)$ として「 x が期待効用を増す場合、 x は善である」という主張は好悪感情の表現である」という定義をとると、確かに全体としては非認知主義的定義であるように見えるが、数多くの規範倫理原則の中から、義務論理でもなければ徳倫理学でもない功利主義的原則を選び出している点において、実質的には認知主義的立場の明らかな主張が表明されていると言える。すなわち、 $G(Nx)$ は実践的には Nx である。ただし、理論的には G が主述語なので紛れもなく Gx としての倫理観が優越する。

次に $Z(Gx)$ として「 x が善である、というのは好悪感情の表現である」という認識が期待効用を増す」という定義をとると、確かに全体としては認知主義的であるように見えるが、 x そのものではなく非認知主義的自覚に対する評価になっている点で、実質的には非認知主義的立場の明らかかな主張が表明されていると言える。すなわち、 $Z(Gx)$ は実践的には Gx である。ただし、理論的には紛れもなく Nx としての倫理観によって統制されている。

Nx & $GN \cup Gx$ & NG についても同様である。前者は非認知主義、後者は認知主義に落ち着く。ここから言えるのは、認知主義と非認知主義については、折衷主義的調整が難しいということである。多くの場合、折衷を試みても、いずれかの極に吸引されてしまうのだ。対して、内在主義と外在主義の折衷が比較的容易であるように見えるのはなぜだろうか。認知主義と非認知主義は、定義項に真理値を認めるか否かという根本的な立場の相違による対立であるため、その中間に当たる位置が見出せない。内在主義と外在主義の対立の場合は、内在性質、外在性質の区別自体が曖昧であり、当該性質を述定される対象の輪郭を適度に広げるだけで外在性質が内在性質に変わったり、逆に対象の輪郭を狭めれば内在性質が外在性質に変わったりするという事情がある。たとえば先ほど例に出した「意図」を考えてみよう。

$G(Nx)$ の例である「 x が美的性質を持つことが制作者によって（主要な目的として）意図される」という芸術定義をとろう。 x が額縁に入った絵の物理的境界によって輪郭付けられるとすれば、この定義は紛れもなく外部の意図という外在性質によってなされた外在主義的定義ということになる。対して、絵のタイトル、象徴や引喩からの連想、制作者の名前などを含んだ文化的空間にまで x の輪郭を広げれば、意図は必ずしも外部の要因ではなく、内在的に知覚できる性質となりうる。内在主義と外在主義の折衷に比較的可能性が感じられるのは、もともとその両極の区別が絶対的なものではなく、スペクトル上の相対的な差異と解釈できるものだったからである。「意図主義」「反意図主義」と呼ばれる解釈論的両極の中間に、「仮意図主義」のような折衷的立場 (Levinson, 1996) が容易に成立しているのはその一つの表われだ。

冒頭に挙げた他の対立——實在論と反實在論、原子論と全体論、還元主義と反還元主義など——のそれぞれについて、折

衷主義的理論の定式化がどれほど自然に感じられるか、あるいは本当に折衷主義的と感じられるかという「折衷可能性」の度合いはさまざまだろう。折衷主義は、極端な立場に比べて常識的な説得力を有するのが普通だが、折衷主義を容易に受け付けない対立軸（認知主義と非認知主義のように）と、容易に受け付ける対立軸（内在主義と外在主義のように）との違いに顕著に表われるように、折衷主義の説得力は折衷そのものの可能性、さらには蓋然性が前提になっている。理論の蓋然性と説得力を掛け合わせた期待効用の値を理論の「信憑性」と呼ぶことにしよう。折衷結果として得られる折衷主義的理論の信憑性を評定するためには、形式的図式の具体的応用を見なければならぬ。芸術定義の問題領域において実際に提案されている各パターンの折衷主義的理論を、具体例に即して次に概観することにした。

3 芸術定義の諸タイプ

まず、クラスターの定義の特殊例である選言的定義と連言的定義、そして一般形という三種類の具体例を見よう。

◎連言的定義

x は芸術作品である ⇐ pd

- (1) x は主題を持ち（x は何かについてのものであり）、
- (2) その主題についてある態度・視点を提示し、
- (3) その提示は修辭的／隱喩的な省略によってなされ、
- (4) その省略は欠損を充填するよう（解釈するよう）鑑賞者の参加 participation を要求し、
- (5) x ならびにその諸解釈は歴史的に位置づけられた文脈（理論）に依存する。

(Danto, 1981ch.7 の趣旨を Carroll, 1993 が定式化したもの。Carroll, 1993, pp.119, 138)

◎選言的定義

x は t において芸術である ≡ df

(a) x は t における中心的な芸術形式の一つに属し、かつ、t において芸術が持つ機能を発揮させようという意図で作られている

または、

(b) x はそうした機能を極めて高い程度で発揮する人工物である

(Stecker, 1997, p.50)

◎一般的クラスター定義

(このタイプは「必要十分条件を特定する定義」としては具体的事例が存在しないが、それに最も近いものとして Longworth & Scarantino, 2010, p.163 を左に掲げる)

〈芸術であること〉の必要十分条件が〈ZであることまたはYであること〉というようなZ、Yが存在し、(i) ZとYは空でない連言(たとえば「PかつQかつR」)あるいは連言の空でない選言(たとえば「QかつRかつSかつT」または「PかつQかつW」または…)である。(ii) 正確にどの選言肢が十分条件なのかについては、非決定性がある。(iii) ZはYを含意せず、YはZを含意しない。(iv) Zは芸術を含意せず、Yは芸術を含意しない。

この三つを比べると、連言的定義は該当する対象の外延が狭すぎ、選言的定義は外延が広すぎるといふ欠点がある。連言

的定義では、「主題」「視点」「省略」「参加」などの語の意味をよほど広くとらないと、五項目すべてを満たす対象はいわゆる芸術作品のほんの一部になってしまう。対して選言的定義は、(b)によれば都市の夜景のようなものも無条件で芸術になりかねないが、それは定義として広すぎる。連言と選言を組み合わせた一般的クラスター定義はどうかといえば、その複雑さを補って信憑性を確保するための項目(ii)が、定義として求められる最低限の形式からの逸脱を示している。一般形の中で最もよく知られたこの定義が必要十分条件の特定に至っていない事実は、クラスター説の方向での折衷主義的定義は不可能であることを示しているように思われる。

次に、内在主義的命題に外在主義的演算子をかぶせるの(Nz)タイプ、外在主義的命題に内在主義的演算子をかぶせるN(Gx)タイプを見よう。

G(Nx)タイプ

xは芸術作品である = df

xは美的関心を充足させるような性能を与える(主要な)意図をもって作られた物事である。(Beardsley, 1983, p.21)

xは芸術作品である = df

適切な素養を持つ人々によって、一つ以上の側面に沿って、先行する諸芸術作品に顕示された過去または現在の一般様式または一般諸様式とxが繋がりをつけられうる。繋がり linkage をつける方法は、反復、増強、否認、総合、再解釈、維持、歪曲、拡張、再構築、活性化、根底的再解釈など、限りがない。(Carney, 1991, pp.273-274)

N(Gx)タイプ

xは芸術作品である = df

x と類似非芸術との間の相違は、ほとんど不可視で志向的・象徴的なものであれ、当代の政治的経済の物理的条件の中に深く根差した制度的承認を通して客観的に自らを顕示する。(Kleinmichel, 2019, p.227)

G (N_x) タイプとして掲げた二つの芸術定義のうち第一のものでは、内在的な美的性質を持つことを「制作者が意図する」という具合に、内在性質が外在的關係によって修正される。「意図」が制作者の伝記的情報までを裏付けとして要求するような現実意図として解釈されるならば、この芸術定義は外在主義の極に近づき、作品の特徴として自ずと現われるようなものだと解釈されるならば、この芸術定義は内在主義の極に近づく。

G (N_x) タイプとして掲げた第二のカーニの定義は、その趣旨を次のように書き換えることができよう。「x は芸術作品である || \exists x の内在的性質を、先行する諸芸術作品との関係において一般様式との繋がりて歴史化することができる」これをさらに言い換えれば、「x の内在的性質は歴史的文脈へ組み込むことができる」「x の内在的性質が制度的承認を受けべきである」というような言い回しになるだろう。これはまさに内在性質を外在的に認知されたものへ変換する手続きによる芸術定義であり、「制度的承認」を「制作者の意図の周知」に置き換えれば、第一のビアズリーの意図主義的機能主義と同じ定義が得られる。

N (G_x) タイプはどうか。この一節はもともと芸術定義として提出されたものではなく、社会实践活动的芸術を芸術的実践と区別する基準を述べた論説の一部を芸術定義風に私が書き換えたものである。簡単に言うとこの立場は、「制度的に芸術とされるものは、その芸術的承認が必ずや物理的内在性質として反映され、知覚されるものだ」という芸術観に他ならない。これは外在性質による論理的特徴づけに経験的な内在性質を結び付けるタイプの定義であり、論理的定義の面と経験的探究の面の両方から吟味されるべき立場と言える。歴史的継承で芸術を外在主義的に定義しておいて、遡行した原点に美的意図による扱いを設定せざるを得なくなった歴史主義的定義 (Levinson, 1979; Davies, 2000) も同じ類型に属するだろう。

この二種の芸術定義は外見的に全く異なり、内容的にも対照的である。① (Zx) タイプは「xは特定の内在性質を持つということに外在的認定を受ける」、Z (Gx) タイプは「xは特定の外在性質を持つということが内在性質に反映される、あるいは内在性質で基礎づけられる」という意味であり、前者は特定の内在性質が定義的・外在性質の必要条件、後者は特定の外在性質が定義的・内在性質の必要条件という、双対の関係になっている。当該定義に当てはまる対象の外延が異なることも明らかである。たとえば、「これは美的である」ということを「意図する」というような肯定的扱いではなく「疑問視させる」「問いかける」という半ば否定的な扱いを外在性質として与えられた類のコンセプトチュアルアートの場合、① (Zx) タイプには当てはまってもZ (Gx) には必ずしも当てはまらないだろう。芸術性が内在的に反映されないことこそがその種の作品の狙いなのだから⁽²⁾。

次に、残る二つのタイプを見よう。

Nx & GNタイプ

xは芸術作品である ≡ df.

xは、ある側面（経済的、政治的、法的、社会的・・・）において体系的に審美化されており、xは文化圏yの規範・価値観に沿う形で、当該審美化の対象として印づけられている。(Haslanger, 2003, pp. 6-7)のジェンダーの定義を一般文化論の語彙へ変換したもの)

Gx & NGタイプ

xは芸術作品である ≡ df.

アートワールドと芸術実践の機能は、美的コミュニケーションを促すことであり、xは鑑賞をもたらす性能を有する程度

に応じて良いようなものである (Iseringer, 2004, p.23)

Nx & Gz タイプの例として挙げた文化相対主義的定義は、内在的な美的性質で x を定義し、その内在性質が実は外在的關係で条件づけられるものであることを規定する。 Gx & Nz タイプの例として挙げた制度機能説は、外在的なアートワールドの構成要素として x を導入しつつ、アートワールドの内在的機能を他の文化実践との対比において規定する。

文化相対主義的定義ではアートワールドが複数想定され、制度機能説ではアートワールドが一つだけのように読めるが、実はともにどちらでもよい。「文化圏」がただ一つであるような特殊な場合(普遍主義的解釈)も文化相対主義は包括しているし、他方、アートワールドが美的機能を共有する複数のアートワールドシステムから成るものとして制度機能説を読むことも十分可能だからである。しかし両者の間には大きな違いがある。 Gx & Nz タイプの内在性質は、作品に直接顕示されるような性質ではない。 Nx & Gz タイプで芸術認定される作品は、文化的に相対化された意味付けを与えられるにせよ、何らかの内在的性質によって特徴づけられねばならない。確かに折衷的とはいえ Nx & Gz タイプは明らかに内在主義的であり、 Gx & Nz タイプは外在主義的なのである。

ここまで概観してきたところによると、同型構造を持つ芸術定義タイプのペアは、折衷主義の名の通り内在主義と外在主義という両極端の中間的立場を具体化しているように見えるものの、互いに接近しているようには見えない。折衷主義は収束するのではなく、発散し、多様化する傾向が見られるのである。ここで発散というのは、折衷主義的理論どうしの差異が元の両極端の立場どうしの差異より拡大するという意味ではない。すでに折衷的であるがゆえに更なる互いの折衷の仕方が見通しにくく、見かけの異質性が際立つという意味である。元の極端な純粹形理論が別々に有していた内在性と外在性の差異を、折衷主義理論は各々の中に内在化させているために、互いの異質性が結晶し不可逆的に分岐するように見えるのだ。

以上のことは、内在主義・外在主義のような折衷主義が成立しやすい対立軸における観察であり、もしも認知主義・非認

知主義のような折衷主義の成立困難な対立軸において折衷主義的理論が成立するとすれば、発散・多様化よりも収束する傾向が見られることが予想される。困難の達成ルートには、互換性のない解決が何通りもあるとは考えられないからである。そしてその収束性に応じて、折衷主義的理論は本来の強力な説得力を示すに違いない。

本稿での確認は大まかなものにすぎず、芸術定義論における折衷主義的理論の可能なすべてのタイプが網羅されてはいなかったかもしれない。それでも、旧来の理論から新しい理論が生まれる論理的メカニズムに応じた既成諸理論および新しい諸理論の評価法に一定の見通しを与えるには、部分的であれ「折衷主義」の生成メカニズムの解明と、生成された諸理論間の相互関係の評定が望まれるだろう。そのために必要な、折衷主義的立場の分類の方針案と、折衷結果の収束・発散の様態への注目の重要性が、本稿の予備的確認作業により示されたのではないかと思われる。

参考文献

- Beardsley, Monroe C. 1983 "An Aesthetic Definition of Art" Currier, Hugh (ed.), *What is Art?* (Haven) pp.15-29
- Carney, James D. 1991 "Style Theory of Art" *The Pacific Philosophical Quarterly* 72, 4 pp.272-289
- Carroll, Noel 1993 "Essence, Expression, and History: Arthur Danto's Philosophy of Art" in M. Rollins (ed.) *Danto and His Critics, 2nd edition* (Blackwell, 2012) pp118-145
- Davies, Stephen 2000 "Non-Western Art and Art's Definition" Carroll, Noel (ed.), *Theories of Art Today* (University of Wisconsin Press) pp.199-216
- Dickie, George 1964 "The Myth of the Aesthetic Attitude" *American Philosophical Quarterly, Jan., 1964, Vol. 1, No. 1* pp.56-65
- Dickie, George 1969 "Defining Art" *American Philosophical Quarterly, Vol. 6* pp. 253-256

- Dickie, George 1971 *Aesthetics: An Introduction* (Bobbs-Merrill)
- Danto, Arthur C. 1981 *The Transfiguration of the Commonplace* (Harvard U. P.) 『おぼろげられたものの麥谷』慶應義塾大学出版会
- Dutton, Denis 2006 “A Naturalist Definition of Art,” *Journal of Aesthetics and Art Criticism*, 64 pp.367-377
- Gaut, Berys 2000 ““Art” as a Cluster Concept,” Carroll, Noel (ed.), *Theories of Art Today*, (University of Wisconsin Press) pp. 25-44
- Haslanger, Sally 2003 “Future Genders? Future Races?,” *Philosophic Exchange*, 34 pp.4-27
- Iseminger, Gary 2004 *The Aesthetic Function of Art* (Cornell U.P.)
- Kleinmichel, Philipp 2019 “The Symbolic Excess of Art Activism” *The Art of Direct Action: Social Sculpture and Beyond*, van den Berg, Karen [et.al], (Sternberg) pp. 211 – 237
- Levinson, Jerrold 1979 “Defining art historically” *Music, Art, and Metaphysics* (Cornell U.P., 1990; 2nd edition, 2011) pp.3-19
- Levinson Jerrold 1996 “Intention and Interpretations in Literature” *The Pleasures of Aesthetics: Philosophical Essays* (Cornell U. P., 2007) pp. 175-213 「文学における意図と解釈」『分析美学基本論文集』勁草書房
- Longworth, Francis & Scranino, Andrea 2010 “The Disjunctive Theory of Art: The Cluster Account Reformulated” *British Journal of Aesthetics* 50 (2) pp.151-167
- Kukasiwicz, Jan. 1920 “On 3-valued logic” McCall, Storrs (ed.) *Polish Logic, 1920-1939* (Oxford U. P., 1967) pp. 16-18
- Stecker, Robert 1997 *Artworks: Definition, Meaning, Value* (The Pennsylvania State U.P.)

註

(一) 非認知主義的定式化は、一定の文に真理値がないという記述が真である、という提示法に則っており、メタレベルで

は認知主義的になるが、三値論理的解釈を行なったときの付値の規則には影響しない。

- (2) デュシャンの『泉』のようなシンプルなコンセプトチュアル作品の場合は、「展示」という形をとることで芸術的外在性質が内在性質に反映されているが、展覧会場に依存しないパフォーマンス作品の場合は芸術らしさを全く示さない作品事例は少なくない。